

もちろんそのようなことは多くなく、むしろ心を開くことの難しさを思い知るだけということの方が多い。

開かれたスピリチュアリティ

このように瞑想の中に他者との関わりを明確に取り入れることによって、出会いに至るような開かれたスピリチュアリティが養われるのではないかという期待が持ってきた。多分そのようなことは送り手と受け手が常に二人一組を作り、かつその役割を交互に交代する神秘体験をする手かざし系の教団では当たり前のことなのかもしれない。いずれにせよ、神秘体験は多様であり、そのための行法も多様である。その行法に他者との向き合いを積極的に取り入れることによって、スピリチュアリティを如何に継承するか、そしてスピリチュアリティが自己完結的にならずに他者との関わりを持つためにはどうすればよいのか、という問題にアプローチすることができると思われる。

どのように他者との向き合いを取り入れるかはいろいろな形があるだろう。その形がどのようなものなのかは、私には今のところ向かい合う瞑想以外には思いつかないでいる。しかし、求道者型が求めがちな自己完結的な靈性を開かれたものに変えていき、自己と他者、存在と意味との二つの不可分を体験し、宗教者に不可欠な「ある種の」倫理性を獲得するには他者との向き合いをスピリチュアリティを養う神秘体験に持ち込むのが、つまり行から出会いへというシフトをもたらす工夫をすることが有効だと思われる。

今一度私なりの神秘体験の目的と定義を言えば、自分が生きることの意味を問い合わせ、自分と向き合い、自分を超えたもの（あるいは他者）と向き合うために、他者と厳肅な出会いをして、無言の教えを聴くことなのである。

寺院の世襲・子弟の発心

高丘捷佑

1 世襲の是非

僧侶に限らないことだが、後継者を直接教育するのは、一般的に師匠である、精神的にも生活的にも指導し、成長させる。仏教僧侶の場合、一人前になるまで、経済的な問題や住環境にも注意を払いながら責任を持って弟子を育てるものである。私自身は未だ若齢の小僧であり、当分は後継者を育成することの心配はない。今回はこれまで育成してきた者として、また現在も育成されている最中の者としての視点から、この問題にアプローチしたいと思う。

今日、日本においては仏教僧侶の師弟関係は、半分以上が血縁のある者同士で組まれている。これは批判されることも多い一面で、幼いころからのさりげない教化を可能にし、日本佛教を持続・発展させてきた重要な特徴の一つであると思う。しかしながら、批判されてしかるべき弊害も間違いなく存在する。

私の師匠は伯父である。父親の長兄の元で僧籍に入った。この方は、尊敬すべき高潔な人柄ではあるものの、わが師ながら僧侶としてはいささか問題があった。

私の祖父に当たる前住職を亡くし、学徒の出征から戻るやなし崩しに後を継ぐことになった師匠は、僧侶たるべきことに意義を見出せず、世襲の問題点を体现したような僧侶になった。

戦争で寺が全焼したためもあるが、志した学問を活かすべく学校に勤め、宗教とは一線を置いて教育者であることに生きがいを感じていた。法務はむしろ副業として勤める、言ってみれば「週末僧侶」。山内に住まずに勤めた期間も長く寺は衰退した。運営も古い時代のままの大雜把なもので、発展性のない寺は当然のように問題を抱え、師匠の病気もあって寺は人手に渡った。師匠も弟

子である私も、寺族の全てが寺を離れることになった。

宗門で定められた修行に行く時間もなく住職にさせられた伯父には、指導者であるはずの師匠がすでにおらず、法務や僧侶としての姿勢を教わることができないまま義務的に檀務をこなす僧侶だった。僧侶であることの責任感や、志を育てくれる人には出会えないままに、住職でいることは「重荷」であったようだ。

病を得て思うように法要を勤めることができなくなつてからも義務として住職を続けていた。休憩中の師匠のそばに控えて、私は師のつぶやきを聴いたことがある。「本当は……坊さんにはなりたくなかったんだ……」50年近く住職を勤め続け80歳になろうとする仏教者の本音である。世襲制の悲劇を感じた。

2 先輩という支え

私は、寺を身近に育ちはしたが両親とも在家人間で、大学卒業までを寺から離れた東京で過ごし、学校の休みや行事のあるときにしか寺には帰らなかつた。私の所属する宗派の場合、宗門の大学卒業後、1年から状況に応じて5年ほど本山その他の修行道場で生活して資格を得ることが一般的である。それ以前には特に作法を身につけることは求められてはいない風潮があるが、たいていは師匠について多少の下地を作り、慣習を見覚えてゆく。私も卒業後に修行に行くつもりで大学時代を過ごしていたが、すでに師匠は病体で私を育てる状況になかなかたため、東京の青年会で基礎を教えていただいた。本来僧籍地ではない地域で、受け入れも難しかつたであろうが、衣のたたみ方から指導していただいた。後進の育成と指導に熱意ある懐の広い先輩方に縁を頂戴した。

大学生活の途中で師匠が倒れ、とにもかくにも資格を取るのに必要とされている法要を通過しなくてはならないのだが、普通ならば師匠が手配・指導してくれるものをどうしたらよいかまったくわからない。基本もできてはいない時期のことで、周囲の助けがなければ勤め切れなかつただろうと思う。

法類や近隣寺院が関わりを持つまいとする中で、たまたま出会つただけの、責任もないはずの方々が、なぜここまでと思うほど熱心に指導して下さった。得する分がないだけではなく、問題に巻き込まれて迷惑をこうむる可能性の大きい中の話である。

籍を置く寺は出ることになる日算が大きい。結果どうなろうと、どこへ出ても胸を張れる僧侶になれ、どんな場所でも通用する実力をつけなければ寺を継いだとしても使い物にならない。本当に住職をするつもりなら問題の解決云々よりも、自分がどのような僧侶になるかが先だ。と強く言われたことは感謝にたえない。

頭の下げ方など基本の礼儀から一々教えていただかなくてはならない未熟者で、たいそう手がかかると思った。

せっかく僧侶になったのだから良縁を結べと、宗門の伝統と仏法に沿つた生活の大切さに触れる機会を頂戴した。まず、仏教者としての根本になるものを積み立てることの重要さを教えられた。やや年齢の近い先輩方からは、慣習にとらわれない発想の重要性、現代において必要とされている僧侶の姿を学ぶことができた。いろいろな立場の方々がそれぞれに、広い視野から物事を見る姿勢を示して下さったことが、いま、私の僧侶としての基本になっている。

教義的なことや理想と現実の世の中の動き・時代の流れをいかに合流させるか、妥協する部分にどこで線を引くか、自分で考える癖をつけさせてもらった。例えば、飲酒や結婚はなぜ戒律で禁じられているのか、また、禁じられていながら、なぜ現代の日本仏教では認められ、奨励されているのか。戒律を守るだけの聖人では勤めきれない複雑な僧侶の役目がある。生臭なだけでは勤まらない聖者としての僧侶も必要とされている。自分はどのような姿勢で立ち、誰に、どのような要求に応える僧侶であろうとするのか。

自分で考えをまとめ、判断して行動する。そのためには元になる情報や経験が必要である。結局のところ勉強するしかないのだ。

大学の恩師のお一人に、常に様々な活動をされている方がおり、御自坊でも宗派の中でも、その他多くの場所に出て教化活動を展開され、後進を育成しておいでになる。

友人がその教授に対して質問した。「そんなにいっぺんに色々な活動をしていて休む暇もなく、収集がつかなくなることはないのか?」と、これに対して教授は「どんなに手を広げても仕事を増やしても、自分はある一つの“要”を持っているから大丈夫なんだ」と答えた。

その要とはその方にとっては毎朝の梵鐘であるという。副住職をはじめ随身の僧侶や、手伝いの方も多くいるお寺である。鐘撞きは小僧の仕事というお寺